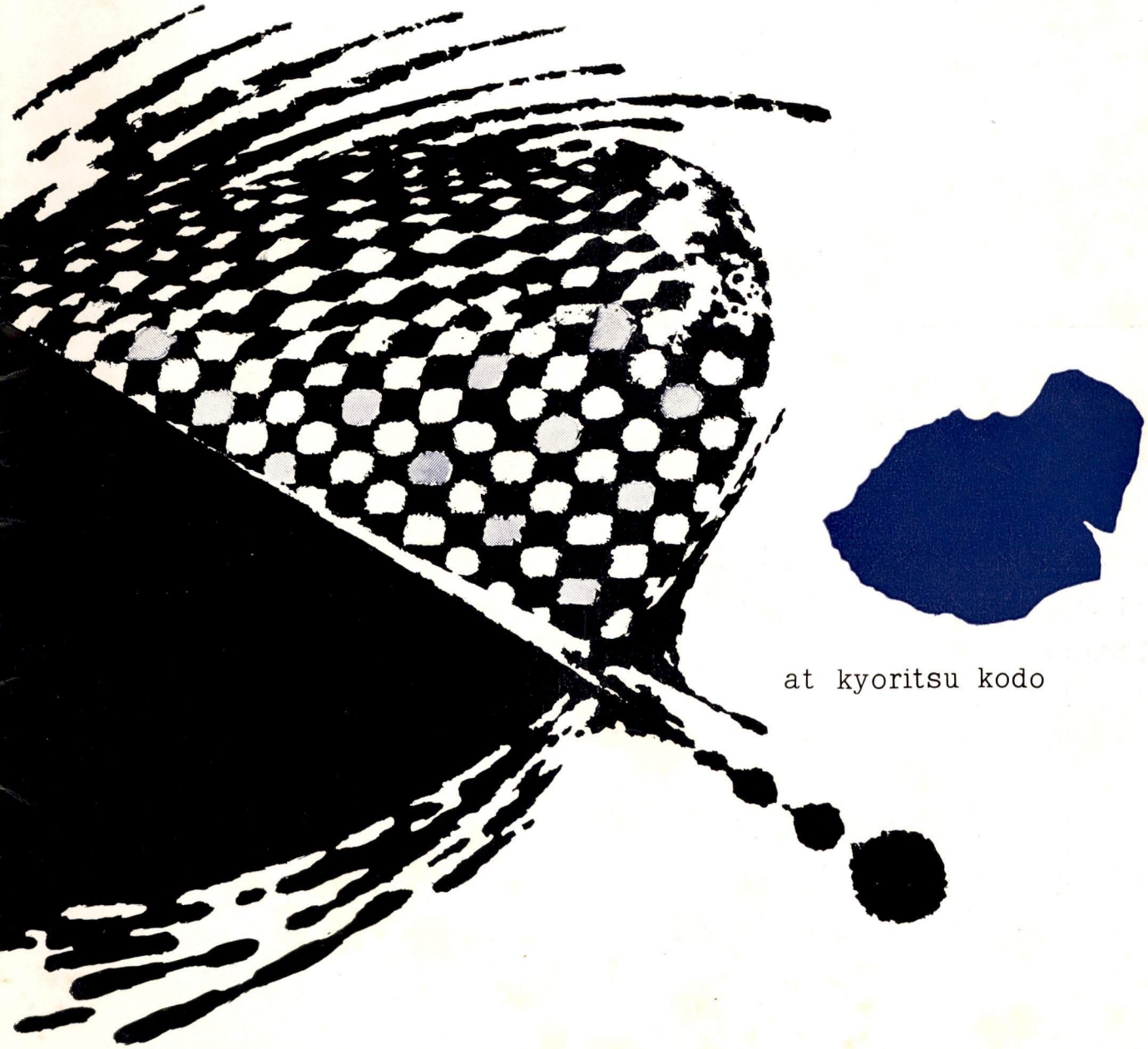
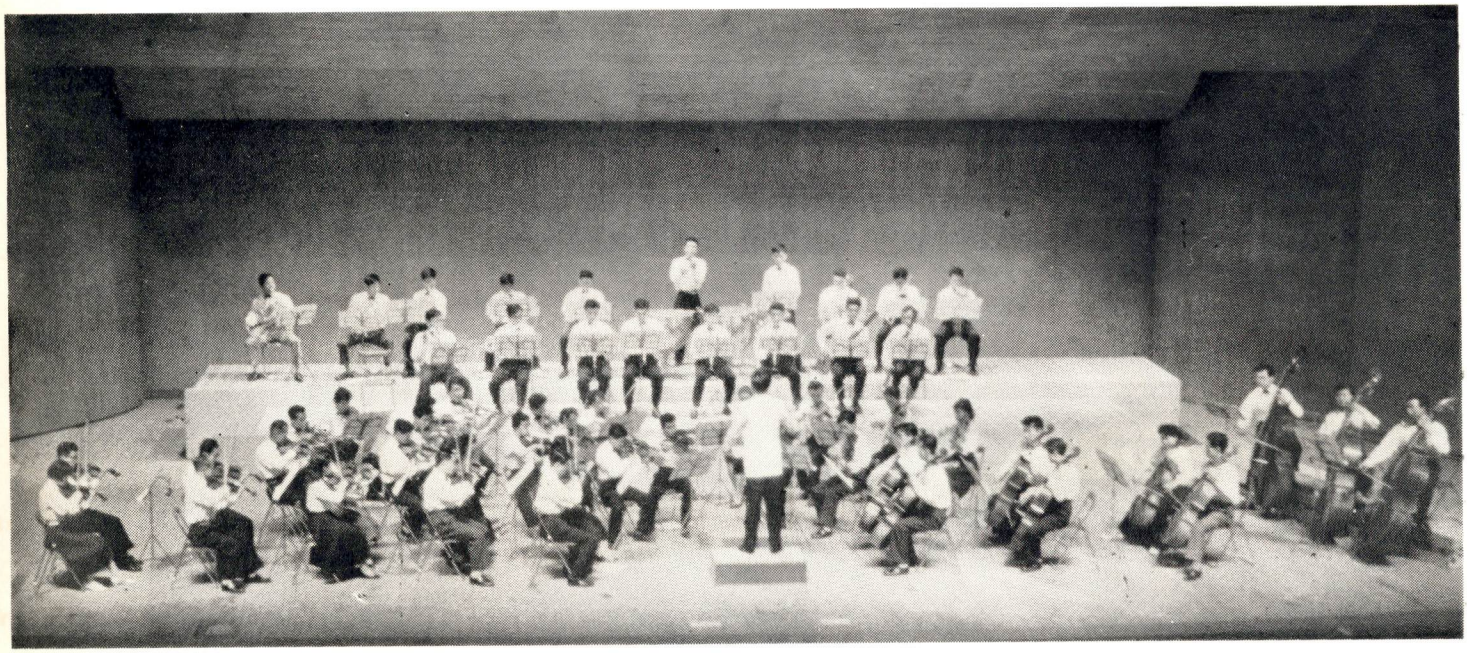
tokyo ro-on new symphony orchestra/rokugen-kai/april 25th 1961

CONCERT

東京労音　新交響楽団第四回定期演奏会



at kyoritsu kodo



ぷろぐらむ

＜第一部＞　六絃会50名の大合奏　　指揮　**鈴　木　　巌**

1.　ロンドとアダーヂオ／カール

2.　山寺の和尚さん／鈴木巌編

3.　ギター合奏による日本民謡集／鈴木巌編

（ひえつき節・そうらん節・中国地方の子守唄・チャッキリ節・八木節）

＜第二部＞　オーケストラ演奏　　指揮　**遠　藤　雅　古**

バイオリン独奏・**山岡耕祚**

1.　アルルの女第二組曲／ビゼー

2.　バイオリン協奏曲／メンデルスゾーン

3.　フィンランディア／シベリウス

＜第三部＞　オーケストラ演奏　　指揮　**芥　川　也寸志**

1.　交響曲第五番「新世界より」／ドボルザーク

1961年4月25日／火／共立講堂

CONDUCTOR/SOLIST



芥川也寸志

日曜日の朝，異様な大鼓の音につれて登場するやぶにらみの音楽談議の主であると共に．映画，純音楽，ミュージカル，放送等に大活躍はまさに楽壇最多忙の作曲家であろう。



遠藤雅古

昭和30年東京芸術大学音楽部声楽科卒業　昭和35年同器楽科を経て指揮科卒業，指揮を山田耳精氏に師事。



鈴木　巌

NHK音楽部門オーデイション連続合格。昭和32年８月世界青年平和友好祭音楽コンクール，ギター部門に入賞。東京労音ギター教室講師。



山岡耕祚

昭和33年東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。昭和34年同専攻科卒業。バイオリンを兎束竜夫，ヴオルフガング，ミューラー　ジヤン，イスナールの諸氏に師事。現在，東邦音楽短期大学教官東京芸術大学講師。

新響のあゆみ

新響委員会



（1）

今日お出で下さった方々の中に昭和32年の第1回演奏会，33年の第2回演奏会の両方ともお聴きになった方もあることと思います。中には第2回以後34年，35年と演奏会を開かなかったので「新響もつぶれてしまったかな？」とお思いの方もあるかも知れませんね。

その方達も，また今日初めて新響をお聴きになる方達もきっと今日の演奏会で“二つの新響„が別々の曲目をもってステージにのっていることに疑問をもたれることと思います。それにお答えするため新響がこれまで歩んできた道と私達の主張をここに述べさせていただきたいと思います。

—ここにも泉あり…労音アンサンブル誕生—

「我々の手でオーケストラをやろう」と言う声が誰からともなく起り，それでは一度集まろうと言うことになって，それぞれ自分の楽器をたずさえて集まって来たのがイガクリ頭の高校生から四十がらみのおじさんまでおよそ40名近く。名づけて“労音アンサンブル„。労音宣伝部長小林氏の指揮で初合せのオケから流れる「ガヤーヌ組曲」のメロデイーは途切れがち，如何に高く評価しても“アンサンブル„とは名づけかねる。それもそのはず，チェロ2人フルート2人，木琴，トランペット，ビオラが各1名，あとは全部バイオリンと言う編成だから……。それでも皆の顔は昼の労働の疲れも忘れたかのようにイキイキと輝やき，一生懸命弾きまくっていた。

——コンサート新聞・昭和30年2月20日—

この“労音アンサンブル„が新響の前身であることをご存知の方は多いことと思います。ただ，そのとき集まったメンバーは40名ではなくて20名ぐらいだったかも知れません。そして，この“アンサンブル„とは言い兼ねるアンサンブルが，早くもその2カ月後には労音西部地域の依頼で高円寺会館に初出演したのですから大した心臓です。それ以後，労音の総会や各地域のつどいにしばしば出演するようになったのですが，これらの演奏会は編曲ものの小品ばかりで，しかも，きわめて下手な演奏でありながら仲間が作った演奏団体だと言うことで温かい眼で見てもらえたためか好評でした。

しかし，出演が度重なるにつれ新しい曲や大曲を練習する余裕がなくなり「自分達で合奏を楽しむのと，出演とどちらが大事か？」とか，「まだ人に聴かせる段階ではない」と言う声も起って来ました。みんなでこの問題を議論した結果，「自分達で楽しめばよいという消極的なものでなく，音楽の楽しさを一人でも多くの人にひろめて行くべきだ。それには，もっと練習を十分にやってから多勢の人達に聴いてもらおう」と言う結論に達しました。

そこで，しばらくの間出演を断わり練習を充実させることになりましたが，丁度そのころ芥川さんが棒を振って下さると言う話がアンサンブルに伝えられました。

翌31年からドレミファも満足に弾けないようなこのアンサンブルも芥川さんの指導で次第に充実し，夏には名も“東京労音新交響楽団„と改め，規約や委員会制約（団の運営に当たる）を作るなど，団の基礎が固まりました。そして32年11月に漸く第1回演奏会を開くまで漕ぎつけたのです。それ以後，今日までの主な出演記録は後記のとおりです。33年11月の第2回演奏会から，今日の第4回演奏会まで定期演奏会を開かなかったのはこの間に会津若松，上田，熊谷の各労音の例会に出演が続いたためですが，これら地方労音の例会では会員の方達が本当に熱心に聴いて下さり，私達も心から演奏し甲斐を　じました。また，これからも機会があればオーケストラの演奏会の殆んどない地方に行き私達の力いっぱいの演奏をしたいと考えております。

（2）

ところで前項に述べた“音楽の喜びを1人でも多くの人にひろめたい„というのが私達の願

◉新交響楽団（木曜組）名簿

第一バイオリン
鈴木忠夫
岸野礼子
谷津浩
池知子
高沢昇三
近藤多恵子
池田裕之
古田つぎ代
小林邦子
木村律
田中卓美

小沢勉
吉岡初瀬
飯野雅章

第二バイオリン
清水長一郎
長瀬世司子
杉崎考男
長坂幸子
菊地忠雄
田中慶子
武内基
正田慶子

正田尚次
望月よし子
佐藤一
森田裕子
橋詰和江
小西史子
大竹祐則

ビオラ
丸山裕平
丸山彊

チェロ
岡崎武雄

小宮山俊夫
森斌
大橋由枝
吉岡桂子
岡柳紀子

コントラバス
松永昇
吉岡泰子

クラリネット
伊藤勝敏
五十嵐滋

トランペット
山中博光
高野勝

サキソフォーン
岩坪英亮

チェーバ
小牧稔旺

トロンボーン
戸田昌宏

ホルン
黒田勝明
高島正武

オーボエ
副田
岩川光一

ファゴット
西崎進治

フルート
小佐野英保
小塚仁志
加藤路子
宇野靖之
浦伸枝
千葉豊

いであり，この主旨にしたがって新響は歩んでおります。私達はこれを音楽運動と呼んでおりますが，私達の演奏に刺激されてアンサンブルの生まれる都市が増え，最後には全国どこに行ってもアマチュアのオーケストラがあるようになると言う夢を抱いております。

私達のオーケストラは他のアマチュアオーケストラのように楽器を上手に弾ける人達だけが集まって上手なアマチュアオーケストラを作ると言うことをいたしません。誰でも（たとえ楽器が弾けなくても），いつでも入団できます。しかし，一方では私達はアンサンブル時代から次第に団員を増し，技術的にも向上して行かなければなりません。ここに一つの矛盾が生ずるわけです。これから楽器を始めようと言う方が増えて私達の団に加わって下さるのは私達の主旨を満足しますが，オーケストラ全体の技術は下の線で押さえられてしまいます。第2回演奏会の前後からこの悩みが生まれて来た訳です。芥川さんがいくら一生懸命指導されても，ある程度以上上手にならないし，また入団が無制限であるのに団員の数は出入が多いだけで余り増えないと言う現象がこれです。アマチュアの技術的レベルが極めて広いのは当然のことですが楽器を始めて間もない人が，入団していきなりジュピターなり新世界なりを弾くと言うのは容易ではありませんし，また，反対に非常に上手な人が入団しても経験の少ない人と一緒では練習の主力がそちらにとられ余り勉強にならない——と言うことになります。そしてどちらの人にとっても不満になり，間もなく止めてしまう結果，団員も増えず練習の能率も上がらず（つまり，上手にならない）となる訳です。

これを解決するには新響を二つに分けて一つは初歩の方が入っても何とかついてゆけるオーケストラ（仮りに練習日をとって木曜オーケストラと名付けます。），もう一つは，ある程度以上の技術をもっている方が入っても失望しないようなオーケストラ（金曜オーケストラ）とするのがよいだろうと言うことになりました。

さらにこうすることによって特定のパートが一つのオーケストラに必要とするより以上の人数になった場合も二分されるので，例えばフルートが6人いてもそれぞれのオーケストラに3人づつにすればいつも余ってしまうと言うこともなくなります。したがって，金曜オーケストラの方はある程度の技術が必要ということになりますが，木曜オーケストラは今までどおり誰でも入って合奏を楽しむことができます。

このような理由で，昨年5月以降オーケストラを二分し，練習曲もすべて分けることにしました。今日は二分してから始めての演奏会です私達の演奏は下手で，音楽の喜びどころでなく苦しみを聴衆の方達に与えることになるかも知れません。しかし，上手でも無感動な演奏と言うものがあります。私達は下手でもせい一ぱいの演奏を致します。そして聴衆の方達に何らかの感銘を与えることができましたら満足です。

今日までの歩み

30年2月　初練習（アメリカ文化センター）

11月　芥川先生を迎える。

31年8月　第1回総会を開き「東京労音・新交響楽団」と改称する。

32年7月　鎌倉において合宿練習を行う。

11月　合唱団との協演で第1回定期演奏会を日本青年館で行う。世界民謡集・ラデッキー行進曲，オーゼの死，芸術家の生涯，交響曲「運命」

33年11月　東京労音5週年音楽祭に出演。劇場支配人序曲，アイネクライネ，P協奏曲戴冠式，交響曲ジュピター，ピアノ石浜和子

34年5月　福島県会津労音例会に出演。小中学生のための音楽教室，例会では，エグモンド序曲，ラデッキー行進曲，交響曲未完成，交響曲運命

9月　第7回世界青年学生平和友好祭代表参加記念音楽会に出演。エグモンド序曲，トランペット吹きの子守唄，交響曲未完成

10月　モイセーェフ舞踊団との交歓演奏会に出演

12月　日本のうたごえ祭典に初参加。“トランペット吹きの子守唄，ラデッキー行進曲„を演奏

35年1月　長野県上田労音例会に出演。「劇場支配人」序曲，アウリスのイフィゲニア序曲交響曲「未完成」，交響曲「運命」，中学生のための音楽教室を開催

5月　埼玉県熊谷労音例会に出演。交響曲一番ベートーベン・皇帝円舞曲，酋長の行列・イストレリータ・ラデッキー行進曲，交響曲未完成，中学生のための音楽教室開催

11月　大田区民会館において「映画と音楽の夕」に出演。モーツアルトの交響曲四十一番，バッハの組曲第三番を演奏。

12月　日本のうたごえ祭典第2回目の出演“青春組曲„演奏

◉新交響楽団（金曜組）名簿

指揮
芥川也寸志

(1.V)
高倉　寿
木沢要治
鳥取博又
松重玲子
林　英治
岡本賢二
岡部カヨ子
保刈八千代
平岩　林

高木明子
林　誠
小林瑠美

(2.V)
田中徳夫
斎藤スマ子
滝沢久美子
松下裕彦
内藤恵美子
二宮伸雄
日比吉子
有馬信行

田中雅子

(Vla)
高木慶三
亀田美津子
行枝玉慶
河村恭子
古川芳雄
木村斐夫

(cel)
高山昌宜
佐藤幸子
飯島秀雄

飛山
立野

(C.B)
小林陽信
小貫幸子
三浦
上田
鈴木

(Fl)
松永　昇
岩川光一

(ob)
前田音彦

(cl)
麻生泰正
広田泰久
木村卓司
阿部静江

(Fg)
仙名　保

(Hu)
徳川文武
斎藤好司

中村勝彦
山田　実
関口賀正

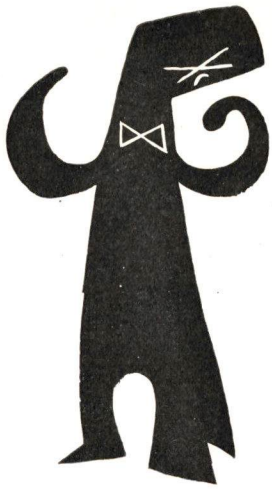
(Tb)家合幹夫
新妻次郎
戸田昌広
渡辺克巳
大和田　正

(Tub)
長岡

(Timp)
山口保宣

ぼくのアマチュアに関する意見

芥川也寸志



〝ぼくたちはアマチュアですから……〟という言葉はよく聞くけれども，その言葉の裏には，さまざまなニュアンスがひそんでいるように思われる。〝どうせ下手ですよ〟〝楽しむことが第一でね〟〝損得は問題じゃありませんわ〟ぼくたち以外のことなんかどうでもいいや〟〝プロに似たようなことはいやだね，けがれたくないからね〟〝……〟etc，etc，

勿論，これらの註釈は，たしかにアマチュアリズムの一面を物語るものであろう。<くろうと>よりも<しろうと>が下手なことは当り前だし，楽しみのないアマチュアなんてナンセンスに近い。損得を問題にしたらその分だけ楽しみはへろうし，何物にも拘束されない自由な精神こそ，アマチュアのシンボルというべきものだ。また，いたずらにプロの真似をするが如きは，アマたるの厳につつしまねばならぬことに違いない。

しかし，言葉は実に重宝なものである。この〝ぼくたちはアマチュアですから……〟という言葉が屢々，便法として，いわば一種のいいのがれの手段として用いられているようだ。屢々というよりもむしろ殆どの場合がそうなのではないだろうか？

もしも，この言葉が便法として用いられているのであったら，アマチュアの楽しみは，道楽と全く同じ意味しか持たなくなり，あくまでも個人の生活の範囲を超えることはない。

無論，ぼくはそういう楽しみを否定しはしない。道楽としてのコーラス，道楽としてのアンサンブル，道楽としてのオーケストラがあって悪いはずはない。しかし，その楽しみは，決して集団の楽しみとはならないだろう。その楽しみをみんなのものにするためには一つの共通した目的意識を持つことだ。つまりイデエを持つことだが，これは音楽における一つの運動に他ならない。自分の楽しみが同時に他人の楽しみになる——簡単にいえば，運動の楽しみとは，こういう性質のものであろう。

新しい日本の文化的特徴の一つは，一部に優れたものがあってもそれが少しも全体のものになってゆかないという点であろう。それを実証する材料は，いくらでも見つけ出すことが出来る。今，音楽の世界でこれにあてはまる一つの例をひきあいに出せば，日本が生んだ優れた演奏家たちについてだ。

全く異る音楽伝統の中に，いわゆる西洋音楽を輸入した日本は，長い間の摸索時代を経て今や世界にも誇れる，優れた作曲家や演奏家を持つほどにもなった。ベートーヴェンや，モーツアルトが暮していた街に生れ，そして彼等と同じ水を飲んで育った音楽家たちとみそ汁や，お茶漬を食べながらなかば手さぐりで勉強した日本人がコンクールで堂々とわたり合い，しかも立派に彼等を打負かすなどということは，新しい日本の素晴らしさの中でも，一番素晴らしい素晴らしさかもしれない。われわれは，それを心からよろこぶべきだろう。しかし——

こういう優れた演奏家たちは，なかなか日本に帰ってはこない。耳の肥えた聴衆——優れた教師——腕っこきの競争相手——それにもまして本場の雰囲気——それらのものにとりかこまれながら，勉強し，そして演奏活動を続けたいという，彼等の気持は無理もない。

しかし，ぼくたちの先輩諸氏による長い間にわたっての努力のおかげで，やっと日本にも，素晴らしい演奏家を持つようになりながら，その素晴らしさが——つまりわれわれの素晴らしさが，少しもわれわれ自身のものにならないとしたら，果して，それを心からよろこんでばかりいられるだろうか。

このような例は，際限なくぼくたちのまわりにころがっている。理由は簡単だ。優れたものと，その反世界ともいうべき末端との差が，あまりにひらきすぎているからである。ヨーロッパが本場なら日本はあまりにも片田舎すぎるのだ。

じゃあどうすればいい？　その答も簡単である。気の長い話かもしれないし，まだるっこしい話かもしれないが，とにかく全体が少しずつでも高まる以外に方法はない。そして，そこにこそ，音楽運動の本来の意味がある。——

その意味を全うするためには，まず，たとえアマチュアであっても〝どうせ下手ですよ……〟という意識を捨てなければなるまい。下手でいいのではなく，やはり，断じてうまくなくてはいけない——あるいは，うまくならなくてはいけない——あるいは，うまくなろうとしなくてはいけない。

音楽の価値は，うまいかまずいかではきまらない，というのはぼくの持論でもあり，アマチュア音楽の意義を強調する場合のきまり文句でもあるわけだが，それでも尚，うまいかまずいかは，依然として，音楽の価値をきめる有力な尺度であることは，周知の如く厳たる事実である。

また，楽しむことも必要には違いないが，苦しみを恐れていては運動の壁をつき破ることは極めて困難だ。例えば一つのアンサンブルの中で，技術的に巧拙の差が大きくなりすぎた場合，思想的な対立が起きた場合，外的制約が大きくなった場合，その他に，大きな壁がみんなの前に立ちふさがる。その壁をのり越えることは，実際生やさしいことではない。しかし，その障害を突破したとき，はじめてアンサンブルのよろこびや楽しみは，運動の実感とともに，みんなのものとなるだろう。

損得はたしかに問題にならぬかもしれぬし，プロの真似をしても何の意味もないかもしれぬ。しかし，アマとプロとを単に経済的概念のみで区別することは，ほとんどナンセンスに近い。スポーツにおけるアマ規定の如きものを，音楽にあてはめたら，およそ音楽運動などというものは成り立たない。もしも，それをアマの純潔と考え，誇りと感じ，節操だと思うのなら，思い違いもはなはだしい。

それどころか，活動によって少しでも収益をあげ，それによって個人の生活がなにがしかでもプラスになることが出来れば，それが一番望ましいことだとぼくは考える。たとえ，その収益が，ラーメン一ぱいに満たなくても，それを恥じる必要はない。その収益がささやかなものであったという点においても，また，ささやかながら収益を得たという点においても——。

その形態においては，全くプロと同じでありながら，尚，燦然として光り輝いてこそ，アマチュアリズムの名にふさわしいのではないだろうか。このぼくの意見は，屢々大きな誤解をもって迎えられたが，新交響楽団とともに歩いたこの数年間は，ぼくにますますその確信を抱かせた。

今の日本で，アマチュアの果す文化的，音楽的役割は計りしれぬほど大きい。〝ぼくたちはアマチュアですから……〟が，もっと自然で，もっと明るく，もっと楽しそうに，もっと誇りに満ちた口調で語られることをぼくは期待する。

アマチュアについて，書かねばならないことは，まだまだ多い。これは，そのほんの一部分でしかない。しかし，ことによると重要な一部分かもしれないのだが——。

いろいろなこと

◎我々オケの中には弦楽四重奏団が四組ほど存在しておりレジャーを芸術しているのです。

◎女性だけで編成しているカシマシ　カルテットは俺達の名物である。（お勇ましい事で……）

◎仲間で一番血の気の多い管楽器の連中は，最近ブラスバンドを結成して盛んに唾きを飛ばしている。

諸君は，我々シロウトのオンガクを聞き流した結果，自分も楽器をいじってみたいと思わなかっただろうか，銀座か，そこらの楽器店に行けば幾らでもいじらせてくれるが，お金をポンと払えば自分のものにもなります。団所有の楽器は，オーボエ，ファゴット，ホルン，コントラバス（三台）で，コントラバス以外は満員御礼の状況です。だから，コンバスを弾く人以外は手ぶらで入団されても，ダニーケイの様に楽器の口真似でもしているより仕方がありません。口三味線入りのオーケストラなんてのも，楽器を弾くより比較的音程は確かで，その上盛さんの様にゲンダイ的で大へん結構かもしれませんが……。

楽器を手にしたら，最もポピュラーであるドレミファ程度はすぐ弾けます。テクニックに関して「楽器を買っちまったが上手になれないじゃないか」等の責任問題については，ゲイシャ，フジヤマの国の大臣じゃないが，「オ答エデキマシェン」

今までに取り組んだ曲目

注…やれるやれないは別

ベートーベン	交響曲　第一番
	交響曲第五番（運命）
	エグモント序曲
モーツァルト	交響曲第四十番
	交響曲第四十一番（ジュピター）
	アイネクライネナハトムジーク（弦楽夜曲）
	劇場支配人序曲
	ピアノ協奏曲第二十六番（戴冠式）
シューベルト	交響曲第八番（未完成）
ドボルザーク	交響曲第五番（新世界より）
ビゼー	カルメン組曲
	アルルの女組曲
グリーグ	ペールギュント組曲
レスピーギ	リュートの為の古代舞曲とアリア
グルック	アフリスとイフゲニア序曲
ハイドン	交響曲第百番（軍隊）
	交響曲第百一番（時計）
ヨハンシュトラウス	喜歌劇蝙蝠序曲
	皇帝円舞曲
	芸術家の生涯
	デラッキー行進曲
ハチャトリアン	仮面舞踏会
バッハ	管弦楽組曲第三番
メンデルスゾーン	バイオリン協奏曲
シベリウス	フインランディア

六絃会のあゆみ

昭和33年９月，東京労音第１回ギター教室を開講，昭和34年２月修了と同時に名称“六絃会„と云う研究会を組織・独奏，合奏曲を練習し，お互に研究を深め合っている。昭和34年４月～35年９月迄の第２回・３回・４回の東京労音ギター教室を修了した有志が“六絃会„に参加し現在では総勢80名のメンバーになっている。昭和35年11月第１回発表会を渋谷公会堂で独奏曲，合奏曲のプログラムで行った。今回の出演が２回目で，この合奏会後５月に独自の発表会を行う計画で練習に励んでいる。



ギターで日本民謡を合奏する時には，今迄沢山の試みがされて来て，特定の曲のみギターの音に合うとされていました。

今日の此のプログラムには，山寺の和尚さん，ひえつき節，ソーラン節，中国地方の子守唄，ちゃっきり節，八木節と，言って見ればギターの常識外の曲ばかりなのですが，編曲さえ面白くすれば（実は此が問題なのですが）今晩の演奏のようになるのです。

六絃会は皆初歩的な人達で高度の技術は望めないので編曲は易しくなっておりますが，練習を重ねれば面白い演奏になります。途中でとんでもない音があったり，奇声が出て来ても決して笑わないで下さい。皆一生懸命なのですから。

尚六絃会では今日の此の会の為に日曜を全部返上して練習致しましたが，芸術にはもう此れで良いと言う事はないのですし，未熟な点は笑って御許し下さい。

尚曲目の中に，カールのアダジオとロンドは，ギター三重奏用のオリヂナルです。

鈴　木　　巌

新響へ入団なさいませんか

ニッポンのお役所のようにハンコなんか不必要だし勿論，ご尊顔を貼り付けたりリレキ書なんかもいりません。貴方が世界的盛り場である渋谷で下車されて，道中何んの話も無くアンパン屋，ラーメン屋，チョット一杯屋等を横目で見過ごしながら，めずらしく舗装された坂道を上れば，**"全金会館"**とイカメシイ表札の掛った建造物に到着致します（この間，駅から歩いて五分，走って三分）勝手に玄関に入ったら，そこらのシッポを出している，わらぞうりをつっかけ，シッポを踏んずけてひっくり返えらない様に充分気をつけて階段を上れば，結果として二階に行ける事になっています。あとは重い防音扉を，もろ手で押して，ズイッと中に入って頂ければ親切な仲間が人事委員を紹介してくれるでしょう。事務処理は簡単ですが，貴方自身の住所と勤務先，所在地，電話番号ぐらいは気憶して来て下さい。入団される方で「忘れちゃった」なんてのがちょいちょいありますから……（老若男女並びに国籍を問わず）



練習日，時間

木曜組…毎週木曜日 PM. 6時半から9時迄　人事委員　森(チエロ)

金曜組…毎週金曜日 PM. 6時半から9時迄　人事委員　田中(バイオリン)

（金曜組はテストが有ります）

